

## 頭塔出土 緋銭（さしぜに）

緋銭とは、複数の銭を中央孔に紐を通して一まとめにしたもので、差銭あるいは緋銭とも書く。ここで報告する緋銭は、1996年の第277次調査で、上層頭塔の心柱抜き取り穴から出土したものである。すでに『奈文研年報1997-Ⅲ』において概要は報告しているが、その後の整理作業で新たな知見を得たので、その成果を報告する。

**出土状況** この心柱抜き取り穴は1989年の第199次調査で検出し、途中まで掘り下げている。内壁に炭化物や灰が残ることから、落雷による火災で心柱が廃絶したと推定された。第277次調査では、下層頭塔の確認のため、さらに内部を掘り下げたところ、現頂上から約2m下で緋銭と琥珀玉5点が出土し、さらにその直下で上層頭塔の礎石を発見した。礎石直上には漆喰・灰・炭化物が漏斗状に堆積し、その後暗灰褐色土と黄灰粘質土で交互に抜き取り穴を埋め戻しており、心柱を抜き取った後、埋め戻し前に緋銭と玉を投入したことが判る。第199次調査では、抜き取り穴を埋めた後に、凝灰岩製六角屋蓋十三重石塔を建てたと推定している。

**緋銭の現状・内容** 出土した緋銭は、銭の中央孔に撚繩を通し、繩の両端を玉結びしてはずれないようにしたものである。出土時にはすでに繩が途中で破損して切れていたため、39枚の銭がはずれていたものの、なお83枚の銭が、繩が銭孔に通った状態を保っていた。また、はずれた銭にも表裏に他の銭が付着していた痕跡があり、本来一連の緋銭であったことがわかる。繩・銭の保存状態が比較的良好的ため、緋銭を土ごと固めて取り上げる必要がなかった。そこで整理作業では、鑄造した銭を1枚ずつ分離し、それぞれの銭種と銭文の向き・配列を確認することとした。

今回確認した銭種の内訳は、和同開珎4枚、萬年通寶34枚、神功開寶83枚、不明銭1枚である。また銭文の向きと配列には特に規則性を認めることはできなかった。例えば、同一銭種が連続する場合も方向が統一されておらず、3種の銭を意識的に区別した様子も無い。ただし、両端の銭は銭文を内側に向けており、意図的に銭文を隠した可能性もある。

また、繩の繊維片を微量採取し、顕微赤外分析法で

スペクトルを測定したところ、麻類の繊維であることを確認した。材質については、さらに詳細な調査を要するが、苧麻の可能性が高い。

**奈良時代の緋銭** これまで平城京では、左京三条二坊で土坑SK4355、左京四条四坊九坪で土坑SK2408から緋銭が出土している。SK4355は三条条間南小路SF6430上に掘られた浅い土坑である。緋銭は錆化固着が進んでおり、出土状態のまま取り上げて保存処理を行った。そのためX線撮影が行えず、銭の枚数は肉眼で97枚まで確認した。また銭文を確認できたのは和同銭4枚のみである。SK2408でもやはり出土状態のまま取り上げ、肉眼とX線撮影により97枚の銭を確認した。銭文を確認できたのは和同銭6枚のみである。ただし共伴した土器の年代（平城Ⅱ）から見て、残りも全て和同銭であろう。いずれも正確な枚数は不明であるが、ほぼ100枚が一まとめとされた100文の緋銭である可能性が高い。榮原永遠男は古代の銭の貯蔵・運搬用として100文ずつのまとまりの存在を想定しており、この2例はこれに合致する（『日本古代における銭貨の存在形態（その1）』『出土銭貨』第5号1996年）。また、元興寺塔基壇、興福寺南円堂基壇、坂田寺須弥壇下でそれぞれ10枚の緋銭が出土しており、100文の下の単位として、10文のまとまりも存在した可能性がある。なお、97枚程度で100文とみなす「省百法」が奈良時代から存在したとする説もあるが、平城京出土例からは、上記の理由で確定できない。

一方、頭塔出土の緋銭は総数122枚と端数が出て、銭種も統一されていない。しかし、これも他の出土例を参考にすると、特殊な例ではない。左京二条六坊十二坪のSK3165や坂田寺の土坑SK160では、埋納された銭の中に10枚前後の緋銭や布にくるまれた銅銭などの小さなまとまりが含まれ、興福寺南円堂基壇では和同銭4枚の緋銭もある。これは、おそらく複数箇所・人から集められた

様々な形態の銭をまとめて納めたものらしく、総額も端数が出るようである。頭塔の場合は、同様にして集めた銭をすべて緝にしたのであろう。奈良時代には、用途・目的に応じて様々な緝銭が作られたらしい。

**銭種の組成** ここでは、近年活発な中・近世出土銭の分析法を応用し、この緝銭を検討してみよう。表はほぼ同時に埋納されたと考えられる平城京周辺の銭貨出土例のうち、10枚以上の銭種が判明しているものの組成を百分比にしたものである。井戸の2例は祭祀用と考えられ、他は鎮壇具である。最新銭を出土した興福寺南円堂基壇を一番上に置き、その他は和同銭の比率が低い方から順に並べている。銭種組成と銭の発行年を基に、大まかな時期区分が可能となる。ここでは、1期：和同のみ、2期：和同5割以上+萬年+神功、3期：和同1割程度+萬年+神功、4期：隆平永寶を含む、という区分を行う。1期の実年代は萬年通寶発行（初鑄760年）以前になる。なお、和同+萬年という組成が存在すれば1期と2期の間になるので、仮に1'期としておこう。2・3期は神功銭発行期間（765～796年）のそれぞれ前・後期となる。4期は隆平銭発行以降（初鑄796年）となる。2期の井戸2例では平城V（780年前後）の土器が共伴し、4期の興福寺南円堂は813年という建立年代が判明しており、この変遷がおおむね正しいことがわかる。頭塔例は3期にはいり、ほぼ長岡京期の埋納であろう。また、坂田寺の2例は2期と3期に別れるが、これは建物の建立時期の差であろう。

なお、十三重石塔の舍利荘嚴具を狙った盗掘孔を現頂上直下で検出しているが、そこから舍利荘嚴具の一部と見られる銭貨が4枚出土し、中に隆平銭が含まれていた。緝銭の投入と石塔の造立には時間差を見た方がよい。そうすると、緝銭・玉の投入行為の意味は、石塔造立のための地鎮ではなく、落雷といった災いの再発防止を祈る祭祀とも考えられる。

また、銭種組成は、その時期の銭貨流通量を反映すると考えられる。そこで、和同銭の比率の推移を見ると、2期から3期にかけて和同銭の流通量は激減したらしい。萬年・神功銭は発行当初和同銭の10倍の価値が与えられていたが物価の高騰を招き、宝亀3年（772年）には新旧3銭の同価施行となる。このころから和同銭の回収が進んだようである。頭塔緝銭の銭種組成と3銭の区

銭種組成表

別の無い扱かわれ方は、このような状況と合致している。なお、和同銭には新・古の2形式があるが、上記の出土例では、銭文が分かるものに古和同は含まれていない。実は平城京では古和同の出土数が極端に少なく、新和同に比べ鑄造量が少なく、発行期間も短かったと考えられる。おそらく、平城遷都前後には、新和同に切り替わったのであろう。

次に、4期の興福寺南円堂例では、隆平永寶発行後15年以上を経ても旧銭の割合が半分以上を占め、和同銭もまだ1割程度残っている。そもそも隆平銭発行の詔文では、5年以内で旧銭の使用を禁ずるとした。しかし、同年には鑄銭の原料不足解消のため銅幣金具を廃止し、さらに延暦17年には流通量確保のため畜銭禁止令が出されている。それでも、新銭の発行量が不足していたことが、この例からもうかがえる。おそらく大同3年（809年）の勅で新銭不足のため旧銭の併用を公式に認めているのは、きわめて現実的な措置であったといえよう。

平城京では、銭貨は特に珍しい遺物ではなく、当時流通が盛んであったことが分かる。一括埋納の事例も増加しており、これらを利用して都城における銭貨流通の実態を探ることが期待できる。今後は、京内の事例に加え、他の都城や地方の事例も含めて、分析を進めていく予定である。

（臼杵煎／飛鳥資料館・岩永省三／平城調査部）